

サルトル想像論における「準観察」のテーゼ ： 想像と知覚の差異について

京念屋, 隆史

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

10

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

2022-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026025>

サルトル想像論における「準観察」のテーゼ

——想像と知覚の差異について——

人文科学研究科 哲学専攻

博士後期課程3年 京念屋 隆史

はじめに

本稿の目的は、知覚と想像との差異は何か、とりわけ、想像はどのようにして知覚から識別されているか、という問いの論究である。これは言い換えれば、見ることと思い浮かべることの差異とは何か、とりわけ、なぜ想像は「心の中で」思い浮かべられているにすぎず、心の外に実在するものの表象ではないと分かるのか、という問いである。

ところで、この問いに対して、「知覚は目の前に現前しているものを見ることだが、想像はあたかも現前しているかのように (als-ob) 見ることだ」というのは答えにならない。これはそれぞれフッサールの言う「現在化」と「準現在化」に当たるものだが、しかしその現在化と準現在化の区別とは何でありいかにして可能なのか、というのがここでの問題だからである。そして実際、知覚を（目の前にある対象そのものをありありと捉えるがゆえに）範例的作用とみなして自身の理論にも分析にも大いに活用したフッサール自身が、その想像との差異というまったく初歩的なこの問題を解くことができなかったのである¹。

その自明性ゆえにきわめて困難なこの問いに対する答えの有力候補として、本稿は、サルトルが想像に与えた「準観察 (quasi-observation)」という特徴づけを論じる。それは一言で言えば、知覚的世界は近づいたり手に取ったりして対象の細部や詳細を明らかにしていくこと（すなわち観察）ができるのに対して、想像イメージではそれができない、という主張である。本稿が今回論じないのは、この準観察のテーゼが本当に正しいのかどうか、また、それが誤りだとして、そうでない他の特徴づけにはどんなものがありうるか、である。そうではなく本稿が論じるのは、このサルトルのテーゼがもし正しいとして、それはどのように解したときに最も説得的なテーゼとなるか、どのような理路において最もよく正当化されうるのか、ということである。『イメージネール』（1940）のサルトルの論証は一般的な想像論が陥りがちな誤りや方法論上の瑕疵²をかなりの程度免れており、その最良の部分を選び分けつつ論じたいと思う。このために本稿は、知覚と想像の差異に先立ち「夢と想像の差異は何か」という問いを補助線にとり、デカルトに代表される夢の懐疑論の検討から考察を開始する。サルトルに反して夢は想像ではなく知覚の一種であり、この点では彼は夢の本質を見誤っているのだが、しかしこの謬見こそが翻って、夢ではなく想像にまつわる彼の決定的洞察を逆照射することになるだろう。

1 夢と想像の差異

1-1 判断における現実性／直観における現実性

夢と想像は、どちらもこの現実世界で起きているのではない事柄へと向かっているという点では「非現実的なもの」というカテゴリーに括することはできる。とはいえ両者には、その共通点よりもはるかに重大な差異がある。想像とは違って、夢においては、我々は目の前に見ているものを単なる非現実だと受け取りはしない。むしろこの知覚的現実を受け取るのと同じように、どんな荒唐無稽であろうと、それをまさに目の前で（現にそこに Selbst-da）起こっている出来事として受け取る。他方、こうしたことは想像では生じない。つまり、想像されたものはいつでも、それは想像上のものであり私が思い描いているにすぎない、ということが意識されているのでなければならない。

我々が興味をもつのはこの意味における非現実的なもの、すなわち、非現実にはすぎないと最初から識られている限りでの非現実的なものである。このような、現れ方としての非現実性こそがフッサールの「準現在化」と呼ぶものであり、本稿でも「想像」という語をもつばこの意味で用いる。また、それに対立する知覚の現在化についてもこの意味で語る。これに従えば、夢の世界はこの意味で知覚的に立ち現れる、と語らなければならない。寝ているときには両目は閉じられているのだから知覚はできないはずだとか³、だから夢の世界は彼が「イメージ」したものに違いない、などというのはここでの問題ではない。

それはいつもの現象学者のやり口だ、とある人は考えるかもしれない。それは、客観的に現実存在するかどうかの問題から、現実存在すると「思われ」ているかどうかの問題へと話を限定する、というお決まりの仕草だと。そう解するのは誤解とまでは言わないが、しかし注意しておきたいのは、ここでの議論には、現実性や非現実性が主観的に知られているという限定だけでは粗すぎるということ、そのしり方には実は二種類あるということだ。さらに分け入って見てみよう。

ここで私が導入したい区別は、判断の水準と、それと権利上独立であるところの直観の水準との区別だ⁴。これを本稿では、判断の概念的な実在性定立の水準を「知る」と、それに先立つ直観的体験の受容性の水準を「識る」と、それぞれ記し分けることにする。通常、知覚においては両者の意見が一致すると信じられている、すなわち、直観的に現前的なものは判断上も現実存在として定立されるという信憑があるが、もちろんこの両者は食い違うこともある。このことを見るには錯覚よりも幻覚の例の方がよいだろう。例えば実験のために自ら進んで幻覚剤を注射してもらったサルトルのように、幻覚だと知られている幻覚というものがあろう。白昼にエビやカニが壁に這っている訳がなく、またこの視覚を生み出しているのは以前のメスカリン注射のせいだと知っているのだから、カニは判断上は非現実的なものとして（正確には実在性を否定されたものとして）定立される。しかしどんなに知として知っていようとカニは実際に現にそこに見えてしまうので、その現前性の意味での現実性を判断によって否定することはどうしてもできない。このように、判断の水準と直観の水準はその現実性の判定基準がそれぞれ異なり、ゆえにそれぞれにおいて「現実性」の意味も異なる。すなわち「現実性」は、判断においては定立された信念妥当性を意味し、直観においては現にそこに現出しているという意味での現前的現実性を意味するのである。

それゆえ想像とは違って、夢の中では、その夢の非現実性を——たとえ知っている場合にすら——識っているのではない。（これはサルトルが認めようとしなかったことだが）確かに人はしばしば夢の中で「これは夢にすぎない」と知ることがあるし、知った後もしばらく夢が続くことがある（これは明晰夢と呼ばれる）。この事実が夢の「非現実性」と矛盾しそれを脅かすように見えることからこれを否認する者もいるが⁵、前述の区別を踏まえれば恐るるに足らない。というのも、夢の中で夢に気づいたとたん、その夢が自分の単なる想像へと移行する、などということはなく、夢にすぎないと知られた世界もなお依然として知覚的に私に現れ（識られ）続けるからである。つまりそれは「これは現実ではない」とただ知るだけであり、その知は目の前でなおも続行している（たいていは荒唐無稽な）経験の、その現れ方における現実性をいささかも毀損しない。

1-2 「想像の懐疑」の不可能性

さて、このことを踏まえた上で、デカルトの夢の懐疑を検討してみよう。『省察』第一省察において彼は、自分がこれまでに何度も夢に騙されてきたことを思い返しつこう述べている。

いったい何度、夜の眠りのなかで、いつもどおり自分はここにいって上着を着て暖炉のそばに座っている、などと信じ込んだことだろうか。ところが、私は着物を脱いで寝床のなかで横になっていたのだ。けれども今、私がこの紙を見つめている眼は確かに目覚めたものであり、私が動かしているこの頭はまどろんではないし、この手を私は意図的に、意識して伸ばし、そしてそれを感覚している。これほど判明なことが眠っている人に起こるはずがないだろう。だがそれでは、眠りのなかでもやはり同じような考えによって騙された、ということがないとも言わんばかりである。このことをさらに注意深く考えてみると、目

覚めと眠りを区別できる確かな標識がまったくないことが分かってすっかり驚いてしまい、もう少しで、自分は夢を見ているのだと信じかねないほどだ。(AT VII, p. 19/26)

この行論において注目すべきは、デカルトは決して「自分がいま夢を見ているか目覚めているか自信がない、確信が持てない」と述べているわけではないことだ。そうではなく「私はいま確信を持って目覚めていると言える、そのことは明晰判明に知られる——しかし夢の中の自分もまた同じことを言うだろう」と述べているのである。言い換えれば、人はかならず夢の中では目覚めている——自分がいま眠っている最中だという夢を見ることはできない。だから識別できないのは、目覚めていることと眠っていることの差異ではなく、目覚めていることと夢の中で目覚めていることの差異である。かくして「目覚めている」ということの意味はそっくりそのまま夢の中へと反復され、というよりあらかじめ反復されているがゆえに、「目覚めた現実」がその中のどの段階を指すのかは確定しない。

ここにあるのは、ストラウドが正しく指摘しているように、「目が覚めているときに起こりうることや経験しうることのすべてについては、夢で見ることもありうる」(Stroud 1984, p. 18/40)という原理である。そしてだからこそ、自分がいま夢を見ていないことを証明する実験ないしテストは存在しえない。というのも、「何かしらのテストを行う夢を見ることがありうる」(ibid., p. 22/46f.)のだから。だから、事実問題としても、現実で起こりうるあらゆる経験は夢においても反復可能である。頬をつねってみて実際に痛みの感覚がする、というありふれたテストも、それに基づいて「ということはこれは現実だ、夢なら感覚はしないはずだから」と確信することそれ自体も、すべて夢の中で現実に——夢の中の現実で——起こりうる。

夢は知覚ではなく想像の一種だとするサルトルの主張⁶はまさにこの原理に抵触する。もし夢もまた(想起や白昼夢などと同じ)想像の一つであるなら、サルトルがそれら想像イメージに与えた特徴づけのすべてが夢にも当てはまる、と言わなければ辻褄が合わないだろう。だから実際、彼は次のように論じることになる。これは想像の「準観察」のテーゼの一つの表現でもある。

想像的な世界は存在しないという想像力の大法則[...]。[...]人は、このイメージとしての世界[=夢の世界]の細部を見ないし、細部を現前化することもないし、そうしようと企てることさえない。その意味で、イメージは互いに孤立したままであり、本質的貧しさによって切り離されたままであり、「空虚のなかで」準観察の現象に従属したままである。(Imaginaire, p. 322f./374)

しかし、これらはすべて、想像ではなく夢の特徴づけとしては誤りである。例えば、夢の世界には細部がある。というより、ひとは「細部を観察しようとする夢」を見ることができるのでなければならない。ある人は「それは自分が作り出した世界にすぎず、自分の心の外にちゃんと実在している世界ではないのだから、自分が思い描いた以上の細部を欠いているはずだ」と言うかもしれない。だがそうだとすると、そのとき人は、デカルトに反して「目覚めと眠りをはっきり区別する確実な指標」を手に行っていることになるだろう。というのも人は夢の中で、自分が見ている世界に細部がないことに、それが本物の世界ではないことに気づいて、「ということはこれは夢なのだ」と判然明晰に気づきうるようになるからである。もしそのようなテストが存在するならば、夢を現実だと捉え間違えることは(原理的には⁷)ありえないはずである。

それゆえ、サルトルには夢の懐疑論の意義が理解できない。夢のイメージ説はデカルトの夢の懐疑を意図せずあまりに力強く退けてしまうので、その結果——夢の懐疑論に賛同するかどうか以前に——夢とはもともとそのような懐疑可能性を備えたものだという事実それ自体が、彼にとっては理解しがたいものになる。しかしこのことこそが、翻って、サルトルの想像論の決定的洞察を逆照射しているのである。すなわち、夢ではなく想像イメージに関しては懐疑がそもそも不可能であり、夢の懐疑ならぬ「想像の懐疑」にははなから意義がない⁸ということ。実際、「私が知覚しているこの現実が実は自分の想像にすぎないのではないか」などという懐疑論はまず聞いたことがない。それゆえ(ストラウドの問いをもじって)「君はいま想像イメージ

を見ていないとどうして言えるのか」と問うならば、そこにはもはやいささかも反語的などころがない。この問いは、我々はすでに自分が見るものと自分が思い描くものとあまりに明晰判明に識別してしまっているが、これは一体いかにして可能になっているのか、を問うているのである。そして、この問いに答えることに関しては、サルトルは他の誰よりもよく成功しているように思われる。

1-3 心の内と外

かくして夢と想像の差異は明らかになった。すなわち想像においては、夢とは違って、それが「像」にすぎず本当の現実ではないということ、その世界の内側から明証的に（知るのではなく）識ることができ、かつ、片時も絶えることなく識られているのでなければならない。これこそが想像について特筆すべき点である。だからこそ、（夢と目覚めた知覚とを取り違えるように）目覚めた知覚と想像とを取り違える、などということは起こらないのだ。実際には、取り違えはつねに「見間違え」「思い間違え」という形で、知覚と想像それぞれの内側においてのみ起こる。例えば、壁を這っているカニが実は錯覚や幻覚かもしれないと疑うことはあるが、「いま現にそこに見えているカニは実は自分が想像しているものではないのか」とは疑わない。このように我々は、どれほどの経験の不整合に遭おうとも、それを知覚と想像の境界だけは侵犯しないように修正する。それは、想像と知覚の間のこの境界づけには、我々がふだん決して疑わない「心の内と外」という根本区別が懸かっているからではないだろうか。すなわち、ひとは自分の心の内で起こっていることと心の外で起こっていることだけは混同してはならず、自己触発と外的触発との差異だけはアプリアリに識別しなければならないのである。

このように、知覚と想像の差異というものが、（錯覚、幻覚、想像、夢、等々の雑多な諸区分の探究ではなく）心の外にあるか、ないかという根本的な非対称性の探究であるということから、次のような考えが導かれる。すなわち、ある意味では、自分の心の外にあるものだけが「実在している」と言えるもの、真正な意味で「世界」と呼べるものである。そして、そのような真正な意味での世界性を心の中でたんに思い浮かべられたもののもちえず、したがってイメージは世界構成的でない不完全な表象にとどまる、と。だからこそサルトルは、前項で見た引用箇所「想像的な世界は存在しないという想像力の大法則」（loc. cit.）について語ることができたのだ。このようにして、サルトルの想像論がもつ全般的な特徴は以下の一点に集約される。

イメージの世界の対象は、いかなる仕方であっても知覚の世界に存在することはできない。その必要条件を満たしていないからだ。（*Imaginaire*, p. 26/48f.）

これが、夢に関するデカルトの原理「目が覚めているときに起こりうることのすべては夢で見ることもありうる」の正反対であることに注意されたい。サルトルはイメージと知覚との間に内容的な差異を設定しようとしており、それゆえに夢の本性的見誤った。実際、夢は目覚めと内容的に見分けがつかないからこそ懐疑が可能なのだった。しかしこの夢の理論としての欠点こそがそのまま想像の理論としての利点につながる。というのも、夢に関してはその現実との見分けのつかなさを説明すべきだったのと反対に、想像に関してはその知覚との取り間違えのありえなさをこそ説明すべきだからだ。この点に、内容的な差異⁸を設けようとするサルトルの議論の強みがある。すなわち、想像は夢とは違って、そもそも知覚と内容的に別物だからこそ混同が起きず、明晰判明に区別されるのではないか。そしてそれは究極的には、世界と世界でないものという歴然とした差異によって識別されているのではないか。この点に関するサルトルの所説を見てみよう。

2 知覚と想像の差異——準観察とは何か

想像と知覚とを混同の余地なくアプリアリに識別しているところの内容的な差異とは何か。サルトルの準観察のテーゼがこの点を明らかにしてくれる。それは次のように要約される。

イメージは〔①〕何も教えず、〔②〕決して新たな印象をもたらさず、対象の一面をあらわにすることも決してない。〔③〕イメージは対象をひとまとめにして引き渡す。失うことも待つこともない、すなわち確実性である。〔④〕私の知覚は私を欺きうるが、私のイメージはそうではない。イメージの対象に対する我々の態度を「準観察」と呼ぶことができよう。実際、我々は観察の態度をとってはいるが、しかしそれは何も教えない観察である。(Imaginaire, p. 28/50)

とはいえ、この箇所一つ取ってみても、準観察テーゼはじつは複数の個別の論点の混成体であり、その内実にはさほど一貫性がないことが分かる。本稿 1-2 の引用にもあった、⑤イメージは細部を欠く、⑥想像された世界なるものは存在しない、という論点も合わせればなおさらである。このため本節はまず、④イメージは欺かない、という特徴づけを想像にまつわる前理論的な事実として認めた上で、その理論的説明の候補を①知の先行(学習不可能性)、⑤空白・未規定性(細部のなさ)、②観察不可能性=⑥非世界性、の順で検討していく。

2-1 知の先行／イメージの空白

想像と知覚の差異にまつわるサルトルの特徴づけのテクニカルかつ優れている点は、この差異を、見えている側面や現れている限りでの範囲には求めないところだ。例えば知覚と比べて想像は比較的ぼやけている(感覚の強度が弱い)ことが多いかもしれないが、そうした見た目や見え方による特徴づけは事の本質ではないのだ。

それゆえ、例えば私の目の前には 2 の目が上になったサイコロがあるが、ここでの問題はむしろ、机に接していて私には見えない裏側の面のあり方である。さて、一般にサイコロというものは表と裏の目の合計が 7 になることが知られているので、私はその知を用いて裏の目が 5 であると予期できる。とはいえ、これが真つ当なサイコロである保証はなく、裏の目が 5 ではなく 1 であったり、そもそも 5 の目などないサイコロであったりするかもしれない。このように、知覚には必ず予想外れというものがある。さて今度は、同じようなサイコロを想像しているとしよう。このサイコロの裏面に関して、「自分は 5 だと思ったのだが、実は 1 だった」などということが起こるだろうか。つまり、自分のイメージに予想を裏切られる、ということは起こらないのではないか。これが「知覚は私は欺くこともあるが、イメージは違う」(Imaginaire, p. 28/50)という性質である。

サルトルはこれを、知(志向)がイメージの対象に先立つ、ということから説明しようとしている(「対象は決して志向に先立たない」Imaginaire, p. 29/51)。いま、上の面が 2、下の面が 5 のサイコロを思い浮かべてみてほしい。すると、裏返していないはずの下の面は、すでに「下の面は 5 である」という知によって先回りされてしまっており、だから予想を裏切られることはない。それどころか、そもそも何かを予想し、それが満たされる(充実化される)ということすら成り立たない。例えば、出目が本当に予想通りかどうか期待に胸を高鳴らせながら今か今かと待ち構える、というのはこと想像においては意味がない。こうした理由から、イメージにおいては「何も学習することがない」(Imaginaire, p. 25/47)。

とはいえこれは、「イメージに欺かれることがない」の説明としては少し狭すぎるように思われる。というのも、イメージに予想を裏切られないために、そのあらゆる部分を予想している必要があるのだろうか。むしろイメージとは、知覚にまして、空白や未規定性にみちあふれた現象ではないだろうか。例えば、先ほど思い浮かべていただいた上 2・下 5 のサイコロについて、その側面の目が何だったかをいま言えるだろうか。その面は裏面とは違ってこちらから見えているはずなのだが、にもかかわらず、おそらく空白だったのではないだろうか。ここで「空白」とはつまり、何の目も印刷されていないサイコロを思い浮かべていたということではなく、その面に関して端的に何も思い浮かべていなかったということである。同様に、ただ単に「上の面が 2 のサイコロを思い浮かべよ」と言われた場合も、下の面まで予想済みのことはまずなく、それについては何も考えていなかった、そもそもそのような観点では見ていなかったというのが普通ではないか。そして、この未規定性ゆえに「裏面が実は 5 以外だった」という予想外れが起こらないのではないだろうか。すなわち、私は単

なる未規定性によって欺かれることはないが、だからといって「ということはそれは裏面が 5 であるともともと確実に知っていたに違いない」という逆の結論は導かれぬ。そうではなく、空白はそもそもいかなる予想とも競合しないのだ。

さてしかし、イメージには空白や未規定性が本質的に含まれているのだとしても、それが知覚にはない想像固有の特徴だと結論づけるにはまだ早い。というのもそれは「知覚^{イメージ}像」にも、より適切に言えば知覚表象にも、同様に当てはまる性質かもしれないからだ¹⁰。確かにわれわれは側面の面が端的に空白であるようなサイコロなるものを知覚的に見たことがないから、ゆえにそのようなものは想像の中にのみ存在する、と結論づけたくなるかもしれない。だが、ここには対象と表象（現れ）の混同がある。空白や欠如がありえないのは知覚された対象としての（例えばプラスチックでできた）サイコロであって、それが私に見える仕方に関して言えば、あらゆる規定性が表象されることなどなく、むしろ何らかの欠如を含むのが通常である。目の前にあるサイコロについてすら、例えばゲームで使用するときにはその出目（上面）にだけ着目すればよいのであって、その側面の目まで見ている者はあまりいないだろう¹¹。

2-2 観察・既在性・世界の世界性

とはいえ、知覚表象に含まれる空白は、その対象をあらためて観察しなおすことによって後から埋めることができる。そしてここ、この空白の埋め方においてこそ、知覚と想像の間に最も顕著な差が現れるのではないだろうか。

そもそも観察とは何をすることか。それはものを（単に記号的に思念するのではなく）直観的内実を伴って表象することだ、という規定ではまだ足りない。その意味でなら想像や図像（絵や写真）ですら直観的ではあるからだ。そうではなく観察とは、表象に含まれていた未規定な部分を埋めることによって、それが表象していた対象の詳細をしだいに明らかにしていくことである。それゆえ、サイコロの裏面をひっくり返して確認したり、盲点になっていた側面の目にも意識を向け直したり、その目の数を数え上げたりする、というのがサルトルの言う意味での「観察」の例である。

では、同じことを想像でもやってみよう。先ほどのように「上2・下5のサイコロを思い浮かべよ」と言われて実際に思い浮かべた後に「では次に側面の目はどうなっているかよく見てみてください」と言われたが、このとき側面の目のことなど考えてもいなかったとしよう——ここまでは問題はない、同じことは知覚でも起こるのだった。しかし返答に窮するのはこの次の瞬間からである。自分の想像イメージを、それも自分が思い描いていなかった部分を観察するように言われても、「もともと考えてもいなかったものを、今から見ろと言われても……」という困惑が生じるのではないだろうか。ここでは、3でも4でもどの目を答えてもよいが、どの目を答えようとあらかじめ不適當であるように思われる。この問い（側面の目は何だったか）にはあるべき答えがない。正確には、自分がいま恣意的に決めた答えではない、私が見る前からあらかじめ決まっていたような答えが欠けているのだ。つまり、観察とは一般に、もともとそうであったものを見ることでなければならぬのだが、そのあるべき既在性が想像された対象には欠けているのである。

この既在性は知覚においてまさに対象の対象性そのものを成している。すなわち、対象が（自分が見ていなくても）自分がそれを表象することから独立した客観的実在性をもつということ、素朴に言えば、対象が自分の「心の外」に存在するという意味を成り立たせしめている。確かに、ごく素朴に考えるなら、知覚表象にはその背後に「心の外」の真実在が対応しうるが想像表象には対応しえない、などと言われよう。しかしこのことを素朴でなく捉えるならば、現れの背後に想定された真実在なるもののあり方それ自体も、現れのほうから、現れる仕方のみを手がかりに再把握することができるだろう¹²。

このようなコペルニクス的とも呼べる発想の転換を踏まえたうえで、ここには観察の問題が深く関わっていることを見てみよう。観察するとは、ある対象 X に関して、その性質 A、性質 B……をしだいに詳らかにしていくことだと言えるが、このとき、新たに得られた性質 C（例えば側面の目が 3 であること）は必ず、その対象 X があらかじめもっていたところの性質——私がたまたま見ていなかっただけで、私がいま見る前からそ

ここに書き込まれていた性質——でなければならなかった。ここでさらに先ほどの発想の転換を踏まえるなら、このことを「まず対象 X があって、それが A、B、C……と現出する」と捉えるのではなく、「新たに現れた C が、A と B が紐づけられていたところの或るもの X へと紐づけられる」と捉え直すことができるだろう。つまり、およそ知覚するとは、諸々の現れがあたかもその一つのものから生じてきたかのように捉える一点の消失点を、現れの背後に——というより、諸現出の連鎖の彼方に——措定することだと言える。現出がもつこうした無際限性、始まりと終わりのなさを、フッサールは「地平性 *Horizontheit*」と呼んでいた。そしてこれこそが、「対象が私から独立に、心の外に実在する」という素朴な見解の真の意味でもある。すなわち、「対象が現れの背後にある」ように感じられるのは、それが私がいま見ることによって汲み尽くされはせず、それを（私が見る以前と見始めて以後の方向へと、時間的に）「あふれ出る」ものがあるからだろう¹³。このことをサルトルは次のように言い表している。

そこから、「もの」の世界には何かあふれ出る〔*déborder*〕ものがあることになる。すなわち、瞬間ごとに、見ることができるものより無限に多くのものが常にある。私の現在の知覚の豊かさを汲み尽くすためには、無限の時間が必要なのだ。見誤らないでほしい。この「あふれ出る」というあり方が、対象の本性そのものにとって構成的である、ということ。 (*Imaginaire*, p. 25f./48)

2-3 想像の非世界性

にもかかわらず、この「対象の本性そのもの」を欠いたもの、「あふれ出る」というあり方も汲み尽くせなさも欠いた「本質的に貧しい」 (*Imaginaire*, p. 26/48) もが存在するのだった。それゆえ、「イメージは観察されない」とは実のところ、想像された対象は真正な意味では「対象」などではなく、想像された世界はじつは「世界」とも呼べないということの意味する、見かけよりもはるかに大胆なテーゼなのである¹⁴。そしてその大胆さは、われわれが知覚と想像、心の外と内をきっぱりと識別するその峻厳さに見合ったものでもある。

さて、先ほどの議論を想像に置き換えて辿り直してみよう。素朴に考えれば、想像表象には心の外に真実在としての対象が対応しえないと言えて、これは「対象 X がまず先に存在していて、その同一の対象が A、B、……と現れる」という形式を取らない (= 観察できない) ということの意味する。さらに先の発想の転換を踏まえると、このことは「新たな規定 C (側面の目は 3 である) をもとの規定 A・B が属しているのと同じ或るもの X へと遡って紐づけることができない」と捉え直されるだろう。そして実際、これこそが先ほどのサイコロの事例分析で何度も起こったことだった。すなわち、「上の面が 2 のサイコロ (A) を」と言われて思い描いてから下の面を思い描いても答え合わせにはならないし、上 2・下 5 のサイコロ (AB) を想像した次にその側面を見ようとしても、今度は三面が規定された別のサイコロ (ABC) のイメージをもつだけなのである。このようにして、諸々の現れ A、AB、ABC はそれぞれバラバラに表象として存在しているだけで、いつまで経っても互いに総合されて「一つの対象 X の現れ」として捉えられることがない。以上のことが素朴実在論的に捉え返されたとき、イメージには心の外にある対象が対応しない、という自然的な見方が成立することになるのである。

さらに、想像がこのように地平性を欠くということはそのまま、想像が世界性を欠くということに直結する。実際、現出の無際限性とは世界の世界性そのものである。例えば視界の縁に目を向けるたびにその限界の先にあったものが露わになることや、地球の裏側もまた私が見る前からあらゆる細部があらかじめ確定している (という信憑がもたれている) ことなどが、世界の地平的なあり方の例である。しかし想像ではどうだろうか。先ほど思い浮かべていただいたサイコロの、その視野の縁の向こうには何があるだろうか? 「そちらに目を向けると木でできた机の表面が広がっており、さらに進むと机の角があった」などということではなく、見切れた視野の中に、孤立したサイコロが一つ存在していただけではないだろうか。このことは、想像が (知覚や夢がそうであるような) 一つの世界を開く作用であることを疑う十分な根拠となりうる。さらに、世界の広がりに関して言えることが、その奥行きに関してとも言えるだろう。サイコロの下面を裏返して見てみようとしても

うまくいかなかったのは、ある意味では想像においては裏側というものが存在する余地がないからである。イメージには自分の知らないところがないのは、知らない部分は単に欠落しているからだ（これを「イメージにおいてはすべてが知られている」と解すべきではないのだった）。だから「それ以外にも隠れた関係があるとか、照明を当てられるのを待っている、などと言うべきではないだろう」（*Imaginaire*, p. 26/48）。かくして、イメージの「世界」は、奥行きがなくのっぺりとしている。これが、サルトルの言う「想像された世界は存在しないという大法則」（*Imaginaire*, p. 322/374）の意味するところである。

引用文献

引用文中の強調はとくに断りのない限りすべて原文に属する。〔 〕による省略および付記は引用者による。訳は原則として私訳を用い、参考にした邦訳の頁番号を（原書頁／邦訳頁）の順に記す。

- **AT VII:** Descartes, R. (1642) *Meditationes de prima philosophia, Œuvres de Descartes*, Vol. 7, publiées par C. Adam & P. Tannery, J. Vrin, 1964-1979. (『省察・情念論』井上庄七・森啓・野田又夫訳, 中公クラシックス, 2002年)
- **Hua III/1:** Husserl, E. (1913) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie I, Husserliana*, Bd. III/1, Martinus Nijhoff, 1950ff. (『イデーニ I-I』 『イデーニ I-II』 渡邊二郎訳, みすず書房, 1979・1984年)
- **Imaginaire:** Sartre, J. P. (1940) *L'imaginaire: psychologie phénoménologique de l'imagination*, édition revue et présentée par Arlette Elklaïm-Sartre, Éditions Gallimard, 2005. (『イマジネール——想像力の現象学的心理学』澤田直・水野浩二訳, 講談社学術文庫, 2020年)
- Chisholm, R. (1942) "The problem of the speckled hen", *Mind* 51(204): pp. 368–373.
- McGinn, C. (2004) *Mindsight: Image, Dream, Meaning*, Harvard University Press. (『マインドサイト——イメージ・夢・妄想』五十嵐康博・荒川直哉訳, 青土社, 2006年)
- Stroud, B. (1984) *The Significance Of Philosophical Scepticism*, Oxford University Press. (『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか——哲学的懐疑論の意義』永井均監訳, 春秋社, 2006年)
- 伊集院令子 (2001) 『像と平面構成 I——フッサール像意識分析の未開の新地』晃洋書房。
- 上枝美典 (2020) 『現代認識論入門——ゲテティア問題から徳認識論まで』勁草書房。
- 八重樫徹 (2017) 「経験の分類」『ワードマップ 現代現象学——経験から始める哲学入門』 pp. 33–63, 新曜社。

¹ まさにこの問題を正面から取り扱った『想像・像意識・想起』（Hua XXIII）はこの論点に関する限り完全な挫折に終わり、それ以前も以降も、公刊著作の中では知覚と想像の区別の意味は自明の前提とされ続けた。このあたりの経緯については伊集院 (2002, pp. 108–109) に優れた要約がある。

² 困難は次の二点にある。知覚と想像の差異は何か、という問いに対して、例えば「知覚は受動的・受動的であるのに対して想像は自発的・能動的である（比較的こちらの意志 will に従いやすい）」と答える人があるかもしれない (ex. McGinn 2004, pp. 12ff./24ff.)。だが、①この基準には例外があるのではないか、例えば受動的で意志に従わない想像というものもあるのではないだろうか。それだけでなく、②たとえこの基準に例外がないとしても、想像の想像性が能動性ということから出てくるのだろうか。それはただ外延が一致しているだけではないか。

³ 例えばマッギンはこのように、ベッドに横たわって夢を見ている人間を第三者から見る視点を先取りして論じてしまっている (cf. McGinn 2004, p. 76/108f.)。確かに夢でも想像でも、客観的に見れば彼の物理的な目の前には何もないのだから、その対象は彼がひとりだけで「作り出して」いるのだろう（その点では夢と想像の脳神経過程は似通っているかもしれない）が、その意味での非現実性や自発性はここでの問題ではない。むしろ、想像も夢も客観的に見れば等しく非現実的であるのに、一方においてのみ非現実性が識られており他方では識られていない、という差異がいったいなぜ生じるのか、それがここでの問題である。

⁴ これはそれぞれ『イデーニ I』における「定立的諸性格」と「時間化の様態」（現前的=現在のかどうかに関わるためこう呼ばれる）に該当する。この区別については邦訳『イデーニ I-II』の渡邊二郎による訳注（第3篇第3章注24, pp. 400–402）によく整理されているほか、谷（1998）が存在様相（pp. 303ff.）、時間様相（pp. 320ff.）それぞれに一節を割いて詳述している。

⁵ 前述の通り、サルトルもその一人である。「夢のなかに現れる反省的意識はどれも一時的な覚醒にあたる」（*Imaginaire*, p. 311/362）。また、通俗的にも「そういう人はただ「これは夢だ」という夢を見ているにすぎない」などと言われるのを耳にしたことがあるだろう。

- ⁶ 例えば次の箇所を参照。「私は知覚している」と主張することは、私が夢を見ていることを否定することであり、あるいは、こう言ってよければ、それは夢を見ていないと私が主張するのに必要かつ十分な動機づけである」(Imaginaire, p. 313f./365)。この主張の誤りは比較的好く知られており、例えば八重樫(2017)にも同様の指摘がある。
- ⁷ もちろん、睡眠時は比較的注意力が落ちているので夢の世界の細部のなさへの気づきが起きにくい、などといった心理学的説明を与えることはできるが、それは事の本質ではない。言い換えれば、「私は夢を見ている」という反省的意識が生まれることが「めったにない」(Imaginaire, p. 337/368)という単なる事実から、そのような反省的推論をするためには「論証能力を十分にもっていること、つまり、すでに目覚めていることが必要である」(ibid., p. 312/363)という理論的言明は導きえない。
- ⁸ ここで「内容的な」と言ったのは、もちろん、事象内容(カントにおけるレアリテート *Realität*)という意味での内容ではない。想像されたサイコロと知覚されたサイコロの間には「サイコロである」という規定性、その何(was, what)であるかにおいてはいかなる差異もないからだ。とはいえしかし、その同じ対象がいかなる仕方(wie, how)で現れるか、ということまで含めた広義の内容——それもまた内容にすぎない——について語るならば、想像と知覚とはそもそも中身からして同じではなく、だからこそ取り違えることなく明証的に識別されると考える余地が確かにあるのだ。
- ⁹ イメージは対象をひとまとめにして引き渡す・待つことがない(③)という時間的特徴については、観察不可能性(②)の一環として注13で触れる。
- ¹⁰ それゆえ、準観察のテーゼは「想像表象は観察されない」と解されてはならず、それを超えて「想像された対象は観察されない」と解さなければならない(→本稿 2-3)。知覚像にすら想像イメージと同じ未規定性が含まれるという点については、チザムの「斑入りのめんどり問題」が示唆に富む。原論文である Chisholm (1943)、ならびに上枝(2020, pp. 122ff.)による解説を参照。まだら模様をした鶏をパッとひと目見たときに(by a single glance)、人は、その膨大な斑点の数を(例えば 48 個であるなどと)当てずっぽうでなく言うことはできない。だから、「パンテオンのイメージを頭に浮かべる人なら誰でも、イメージに基づいて正面の列柱の数を数えてみるがいい」(Imaginaire, p. 81f./114)と(アランとともに)言うサルトルに対しては、「斑入りのめんどりを目の前にした人は誰でも、知覚イメージのみに基づいてその斑点の数を数えてみるがいい」と言うほかない。つまり、これは想像であれ知覚であれ一般に表象というものが持つ未規定性なのだが、だからといって、その本当の数を知らずには表象以外のもの——表象の向こうにある真実なるもの——がお出ましになる必要はない。むしろ必要なのはその表象の続きを見ること、表象の数を増やすこと(例えば別の部分に焦点を当てて見直すこと)であって、つまりはそれが「観察する」ということなのである。
- ¹¹ このような場合、日常言語でも「ごめん、見ていなかった」などと言うだろう。このとき、「いや、君は見ていたはずだ。君の顔はそちらの方角を向いていたのだし、君の網膜像にはすべてがその細部まで映っていたはずなのだから」などと言う人はいないだろう(網膜像と知覚像は同じものではない)。この意味での見ること(=知覚的に表象すること)の意味がここでの問題である。
- ¹² これは典型的な超越論哲学の議論であり、とくにフッサール『イデーニ I』第4篇の「ノエマの意味における規定可能な X」 (§131) の議論を念頭に置いている。真実在というものが意識の外に意識から独立してある、という自然的な見方をそれ自体一つの構成されたものとみなして、それが素朴に前提としてしまっている「実在」というものの意味を先取りすることなく、意識(に対する現れ)以外の語彙を使わずに記述するにはどうすればよいか。こうした問題意識から出発して、「意識から独立にある実在」という意識外在的な事実は、「個々の現れが同一の X へと総合されていく、その総合がどれだけ進展していても完結することがないこと」という意識内在的な仕方でも語り直され、もとあった外在性も現れの系列の「進行における無際限性 *Grenzenlosigkeit im Fortgang*」(Hua III/1, p. 346/II-324)という仕方でも、意識の内側から理解可能な超越性として再把握されることになる。
- ¹³ こうした進行における無際限性はそのようなものとして(今、ここにおいて)あらかじめ「下図を描かれている *vorgezeichnet*」(Hua III/1, p. 331/II-303)、ないし「あらかじめ規則を書か」(ibid., p. 330/II-302)れているとフッサールは言う。この点は注意されてよい。実際、観察とは時間の内にある(時間のかかる)過程なのではあるが、だからといって観察行為を始めてみるまでは対象が知覚的か想像的か分からない、ということにはならない。それは、その対象の現出の来歴や進展可能性(ないしその有無)がそれぞれ把持・予持されつつこの現在へといわば畳み込まれており、そうした下図としての規則を前提として初めてこの現在の(知覚的ないし想像的)対象を捉えられる、という仕組みになっているからである。
- ¹⁴ このことはフッサールの捉え返されたときに或る重大な問題を提起する。これはつまり、想像ノエマは対象としては構成されないということであり、言い換えれば、意識による対象構成というのは実はあらゆる感性的直観に対してなされる一般的なものではなく、むしろ知覚にしか起こらない限定的な能作だということの意味するからである。さらに言えば、

我々はどんな感性的触発に際してもまずノエマ（表象 A、AB、ABC……）を手にするのだが、そこから場合によっては構成されることもあるのが対象すなわち知覚対象であり、構成されなければ表象すなわち想像表象にとどまる、ということになるだろう。率直に言って、私はこの破壊的帰結をどのように評価すればよいのか分からない。範型としての知覚を前提としてなされたフッサールの分析全体に疑問を投げかけるとも言えるが、他方でこの大胆すぎるテーゼの誤りを示している可能性もある。そして後者の場合、想像と知覚はどちらも対象構成の所産であるという点ですら同一であり、ゆえにその差異の識別はおよそ内容とは別のところでなされている、という可能性を考えなければならないだろう。この点の検討については他日を期することとしたい。